

エッセイ

コプトの断食

村 上 優 子

「復活祭の買い物に行くんだけど、来る？」

復活祭を間近に控えた木曜日、いつもお世話になっているTさんに誘われ、行く行くと二つ返事でついて行った。オーストラリアでコプト人¹⁾の調査をしていた時のことである。

コプト人はエジプトを中心とするナイル川流域に多く居住しているが、ムスリムではない。彼らは、今となってはエジプトではマイノリティとなってしまったキリスト教徒、それも、キリスト教の中でも少数派のコプト正教会に属している。20世紀半ば以降ヨーロッパやカナダ、アメリカ合衆国、オーストラリア等への移民が増加しており、一説には、100万を超える人口が海外にいるとも言われている。

キリスト教圏に移民することが多いが、可能な限り、彼らは自分たちの教会——即ちコプト正教会の教会——を設立しようとする。このため教会を預かる神父が不足し、本来ならばその任ではないはずの修道士まで神父として駆り出されている。

コプト正教会は、イスラーム圏内にある最大のキリスト教教会であり、キリスト教初期の姿を最もよく残していると言われる。451年に開かれたカルケドン公会議において、後にローマ・カトリック教会や東方正教会となる「カルケドン派」と袂を分かち、以後、別の道を歩んで来た。

大枠の教義面では、実はカルケドン派のカトリック教会や東方正教会とそれほど変わらない。分裂の元となったとされる三位

一体の解釈については、1972年にコプト正教会とローマ・カトリック教会の間で、表現は違うが言わんとする内容は同じであるとして和解が成立している²⁾。

一方、教会組織のあり方や世俗との関係、宗教的な実践の面でははるかに大きな違いがある。例えば、コプト正教会の司祭（神父）は通常、既婚者を選ばれる。未婚の場合であっても叙任前に結婚することが多い。家庭を訪問したり女性の告解を聞いたりするのに未婚男性は不適切である、というのである³⁾。なお、司教は必ず修道士の中から選ばれる。この他にも様々な特徴や差異があるのだが、今回はその一端を少しご紹介したいと思う。

さて、冒頭に登場した復活祭だが、これは一年の中でも最大のイベントである。復活祭に比べれば、降誕祭——いわゆるクリスマス——ははるかに規模が小さい。

準備は一ヶ月半以上前から始まり、最後の一週間ともなれば起きている時間の半分、あるいはそれ以上を教会で過ごすことになる。昼間空いている人は午前中と夜の二度、仕事や学校で昼間行けない人であっても、少なくとも夜には教会へやって来てこの時期特別の祈りに参加する。

復活祭前の日曜日は「パームサンデー」と呼ばれ⁴⁾、キリストのエルサレム入りを祝う。当時の人々が椰子の葉を広げて歓迎したことにちなみ、椰子の葉を編んで十字架やロバ（キリストはロバに乗ってエルサレムに入った）、アクセサリー等を作る。

この日以降、人々は毎日教会へと通い、

エルサレムに歓迎されて入ったキリストが裏切られて処刑され、復活を遂げるまでの道のりをたどって行く。旅——そんな風に彼らはこの一週間を表現する。

復活祭前の金曜日から土曜日にかけてはほとんど教会にこもり切りになり、夜を通して祈りが捧げられる。普段朗読されることのない黙示録が朗読されるのもこの夜である。電灯を落とした闇の中にろうそくの明かりが揺らめき、教会内は静かな朗読と祈りに満たされる。光たるキリストの「死」(＝闇)と夜の闇と。そして人々は朝を待つ。朝の光の中でキリストの復活が告げられ、一週間に及ぶ彼らの「旅」もようやく終わる。この夜を徹した祈りの参加者は、小学校高学年辺りから若い世代が中心である。全体としては深夜まで参加して一度家へ戻り、早朝、復活の少し前辺りに教会へ戻って来る人が多い。

復活祭自体は土曜日の夜に始まり、夜中過ぎに終了する。復活祭として指定されているのは日曜日なので一見少しずれているように見えるが、聞くとところでは、これは、夕方を一日の始まりとするかつてのユダヤの習慣によるのだという。

復活祭に限らず降誕祭等他の祝祭日でもこれは変わらない。私たちの感覚からすると「前日夜」に当たる時が本番で、「当日」は皆で料理を持ち寄って近隣の公園に「アウトティング」(ピクニック)に出かけるのが通例である。

Tさんの言う「復活祭の買い物」というのは、つまり、この復活祭の日に行われるアウトティング用の買い物のことであった。

こういう大がかりな買い物をする場合、彼らが使う店は二つある。一つはガガーニスと呼ばれるギリシア系移民が経営する卸売り店で、羊の丸焼き道具だの、大袋入りの乾燥豆類や穀類だの、冷凍オクラや冷凍モロヘイヤだの、地中海圏で流通しているシャンプー等の日用雑貨だのを売っている。オーストラリアの普通の店舗では手に入れ

にくい品物はここで買うことが多い。

もう一つは、セントラル・マーケットで、これは名前通り、町の中心部にある。農場直営店舗が多く、果物や野菜が安く販売されており、その他肉類、魚介類、乳製品類の店がひしめいている。

この日出かけたのは、セントラル・マーケットの方であった。まず、肉屋で羊肉を2キロ。それから乳製品の店へ行ってチーズを買い込み、更に鶏肉屋へ。野菜の類には見向きもしない。そこからまた肉屋へ行って、別の鶏肉屋へ行って……と、結局この日の買い物は、肉だけで10キロ強、それにチーズを大量、レバノンパンと果物少々にトマト、という結果になった。

野菜は買わないの、と尋ねたら、Tさんは「野菜なんか食べたいと思う人はないわよ」と笑っていた。確かに55日の断食の後である、気持ちは分からなくもない。

断食というとイスラームの「ラマダーン」の断食」が有名だが、キリスト教にも断食がある(ただし、プロテスタント系の教派は外部の習慣であるとして行わないものも多い)。聖書によれば、イエス・キリスト自身、荒野で40日の断食を行っている——もともと、彼は「キリスト教徒」ではなかったが。

例えば、ローマ・カトリック教会の場合は、レント(四旬節)が始まる「灰の水曜日」(復活祭の46日前)及び「聖金曜日」(復活祭直前の金曜日)を断食日としている。かつてはこれよりはるかに日数が多かったのだが、第2バチカン公会議(1962-1965)以降緩められた。

コプト正教会の場合は、ローマ・カトリック教会のものよりはるかに大変である。

まず日数からして非常に多い。その全てを合わせると実に年間210日以上。1年の60%近くを断食日が占めている計算になる。とりわけ、復活祭前の断食はルールが厳しい上期間も非常に長く、最も辛い断食である。

この断食は期間中完全に絶食する、というものではなく、ラマダーンの断食の場合と同じく、1日の中で絶飲食の時間が決まっている。コプト正教会の場合は、日の出からではなく、真夜中から始まり、最も厳格に行う場合は、日没までである。

ただし、修道士や神父は別にして、実際にはこの絶飲食の終了時間は人によって差がある。厳格に日没まで行う人もあれば、正午過ぎまで、あるいは午後3時頃まで、という人もある。終了時刻は、いつも自分が告解（confession）に行っている神父と相談の上で、「その人の精神的な必要と強さに応じて」決められる。断食は、自らを犠牲にして神に捧げる、という意味合いを持っており、それぞれの人が思う範囲・できる範囲でその犠牲を行う。その意味では、断食期間は教会が指定・指示するものであり、人々が一斉に行うものではあるが、実行面においては個人的な実践としての側面も強い。周囲との関係において行われるものではなく、個々各々と神との間において行われる（教会はその仲介及び補助をする）ものなのである。

実際、私が調査をしていた教会でも、断食を行わない人もいなくはなかった。高校生と大学生たちが数名集まっていた時、一人の高校生が自分は断食はしない、と断言したことがあった。

「成長期に断食をするのはよくないっていうからね」

彼のこの主張に、皆は一様に困惑の表情を浮かべたが、しかし誰も大きく反論したり非難したりはしなかった。一人が「した方がいいと思うけれど」とやんわりと言ったが、彼は受け付けず、話はそのまま他の話題へと変えられた。いつもは議論好きで賑やかにあれやこれやと言いつく彼らだが、ある一定を越えたものについては、無理に責めたり反論したりせず、「かわす」もしくは「黙って避ける」という行動に出る。親は子どもに対して「キリスト者であるよ

うに」育てる責務を負うのでまた異なるが、そうでなければ、「こうした方が」と一応意見を述べるとしても、それ以上の強制を行うのはあまり適切だとは見なされない。人を判じ裁くのは神の仕事であって人間の仕事ではないのである。

さて、断食規則の話に戻ると、断食期間中は、単に一定時間飲食しないというだけでなく、摂取する食品についても規制がかかっている。基本的に動物性食品は不可で、菜食が基本となる。鶏肉を含む肉類はもちろん、卵や乳製品も回避対象である。ただし魚類については、どの断食かによって回避すべきか否かは変わって来る。最も期間の長い復活祭は、残念ながら、というのだろうか、「strict」と呼ばれるより厳格な方の断食期間であり、魚類も食べることができない。

肉・魚・卵禁止、というの一見、不殺生を掲げているように見えるが、その意味での禁止ではない。断食の主要な目的は快楽の回避、自分が食べたいと思うものを回避し、執着を断って気持ちを神へと向けるところにある⁵⁾。断食期間は、自らの罪を悔い、恵まれない人々を思い、神に祈る期間であるとされる。告解神父と話し合って決めた時間を絶飲食し、その後、菜食を少量そっと食べる、それが断食期間中の食事の仕方である。食事以外の面でも制約があり、期間中は、華々しいことは全て回避される。結婚は行われぬし、パーティーの類も開かれぬ。

コプト正教会が指定する断食期間は、この復活祭前の55日の他に、次のものがある。

1. 降誕祭の断食（クリスマス前の43日間）
2. 預言者ヨナの断食（レントの二週間前の月曜日から3日間）
3. 使徒の断食（年によって変動）
4. 聖母の断食（8月7日から15日間）
5. 毎週水曜日及び金曜日（一部除く）

このうち「使徒の断食」は、その年の復活祭がいつであるかによって長さが変動する。最短で15日間、最も長い場合は49日間にもなる。この使徒の断食は、ペンテコステ（聖霊降臨祭）の翌日、復活祭から数えて51日目（復活祭の7週間後の次の月曜日）から始まり、「使徒の祭日」（7月12日）の前日まで行われる。例えば2008年の場合であれば、復活祭が4月27日であった⁶⁾ので、使徒の断食の開始日は6月15日である。

この他、コミュニオン（聖餐あるいは聖体拝領）を受ける前に断食（絶飲食）しておく必要があり、実際には、断食する日数は更に多くなる。

面白いことに、逆に「断食をしてはいけない期間」というものも存在する。これは、復活祭から聖霊降臨祭までの間の50日間（復活祭を含む）で、この間だけは、5の水曜・金曜の断食も行われない（ただしコミュニオン前の断食は必要）。

復活祭後の50日は、キリストの復活を祝う期間であり、だから断食は行わないのだ、という話である。また、コミュニオンも小さな祝祭と捉えられており、コミュニオンの後も、断食してはならないことになっている。断食期間中の場合は、コミュニオン後、絶食は解除されるが、食べて良い食品の制限までは解除されない。

断食自体は、全体としては「良いもの」として捉えられており、多くの人はその意義を認めている。が、しかし、だからといって辛いことに変わりはない。肉気が非常に好まれる、ということもあり、それが食べられないというのはなお辛いようである。

復活祭は、キリストの復活を祝うという意味で非常に元々「めでたい」行事であるのだが、この断食の終了と相まって、「めでたさ感」とでも言うべきものは、更に大きく膨れあがることになる。

「もう野菜なんか食べないぞ。肉と肉に肉を挟んでサンドウィッチにするんだ」

Tさんのご主人などは冗談交じりにそう「宣言」していた。実際、復活祭のアウトティングでは、カバブだのコフタ（エジプト版肉団子）だの、グリルしたドラムスティックだの、とにかく出てくるもの、出てくるもの、全てが肉料理である。一応「レバノンパン」と彼らが呼ぶ丸いピタパン（エジプトのパンである「エイシ」は入手しにくいので）なども置いてはあるが、ほとんど誰も見向きもしない。量自体も相当なもので、このアウトティングには150人やそこらは集まっていたが、もう倍くらい人が来ていたとしても十分まかなえたに違いない。

食べることが好きな彼らにとって、復活祭からの50日間は、一年の中でも幸せな期間である。これが終わりに近づいてくると、はあ、終わっちゃう、というため息があちこちからもれ聞こえて来る。聖霊降臨祭は「祝祭」の終わりを告げる日でもある。この翌日から、使徒の断食が再び始まる。そうして、その陰で、苦心惨憺している彼らにとっても申し訳ないと思いつつも、私自身はほんのちょっぴりほっと息をついていた。何しろ50日が終わればまた長い断食期間が待っている。そのためこの50日間の料理はここぞとばかりに肉や乳製品を多用した「重い」ものが多い。おかげで肉を多く取るのに慣れていない軟弱な胃腸がその「ごちそう」に疲労困憊してしまっていたのである。

注

- 1) 彼らを「コプト人」と呼称することに対しては、一度「違和感がある」という指摘を受けたことがある。英語であれば「Copts」の一言で済むのだが、日本語の場合、「コプト教徒」、「コプト人」、「コプト民族」、「コプト族」等々の呼称の中から選ぶ必要がある。確かに彼らはコプト正教会に所属しているが、コプト正教会自体はあくまでキリスト教の教会であり、ローマ・カトリック教会と組織系列は異なるとはいえず、宗教的な大きな枠組みにおいてはそれほど大きな差は存在していない。別に「コプト教」

なる別の何かがあるわけではないのである。

「コプト教徒」と呼称してしまうと、「カトリック教徒」と呼ぶのと変わらない意味合いになってしまう、対象が変わってしまう。

また、「コプト民族」あるいは「コプト族」といった呼び方については、スチュアート・ヘンリが指摘しているように、「文明度」による別、といった側面が忍び込んでいるのではない、という疑いがある。ヨーロッパにおいては、通常「人」をつけて呼称されることが多いので、ここでは「コプト人」とした。

なお、「コプト」という呼び方自体にも、実際には若干の問題がある。彼ら自身、この語に誇りを持っており、「あなたはコプトか？」と尋ねれば、「そうだ」と胸を張って答える。しかし、それは改めてそう尋ねるからであって、日常的な彼ら自身の感覚は、あくまで「エジプト人」である。とはいえ、「エジプト人」と呼称すると一般的にはムスリムが先にイメージされてしまうので、妥協的に「コプト人」を使用している。

2) http://www.vatican.va/roman_curia/pontifical_councils/chrstuni/anc-orient-ch-docs/rc_pc_chrstuni_doc_19730510_copti_en.htmlにて全文を閲覧可能。

3) ただし、これは司祭の結婚が許されているという意味ではない。コプト正教会の場合でも、叙任後に結婚することはできない。

4) 椰子の日曜日。カトリック教会で言うところの「枝の主日」。

5) 目的がここにあるため、教会においては、植物性ミルク等の代替食品も避けるように、と指導される。菜食すれば良い、というものではないのである。また、大量に食べるのも同様の理由で良くないとされる。

もっとも、量についてはとにかく、代替食品に関しては人々の間に特に抵抗感はないようである。実際、一度や二度は皆試してみるものらしい。ただ、試してみた、という人々が口を揃えて言っていたのは、「どうせおいしくないから使わない」ということであつた。牛乳の代わりに用いられるのは大抵大豆由来の「乳製品」なのだが、食べない方が/飲まない方がまし、というのがもっぱらの評判であつた。

6) コプト正教会の復活祭の日付はローマ・カトリック教会のそれとは異なっている。これは、コプト正教会が教会行事の日取りに関し、グレゴリウス暦ではなくユリウス暦を使用していることによる。例えば、降誕祭もユリウス暦の12

月25日に祝うため、2008年現在では、私たちが普段使うグレゴリウス暦の1月7日である。